脳と魂をめぐる討議
茂木健一郎先生特別講義第二回
２００９年5月２６日
合田発言資料

私には、千年生きたよりもたくさんの思い出がある

決算書や詩稿、恋文や訴訟文、昔のロマンス
重たげな髪の房が丸められて折り畳まれた受領証、
そんなものが詰め込まれた大箪笥の引き出しも
私の悲しい脳髄ほどに秘密を隠してはいない
それは一つのピラミッド、広大な地下の埋葬所で
共同墓地よりたくさんの死者たちが収容されている
（ボードレール「憂鬱」、『悪の華』７６）

憂鬱は現在の瞬間と今しがた生きられた瞬間とのあいだに、何百年もの時間を置く。
（ヴァルター・ベンヤミン「セントラル・パーク」

全体的システムを同化することなき局所的システムに全体的システムが浸透すること――それが奇跡である。（エマニュエル・レヴィナス「自我と全体性」）

無限の観念〔デカルト〕は無限の無限化という存在様相である。(...)己が自同性のうちに固定された存在としての〈同〉、〈自我〉が、その自同性の力だけでは内包することも受容することもできないものを内包する。主観性はこうした不可能な要求を充たす。主観性は内包しうるより以上のものを内包するのだ。（レヴィナス『全体性と無限』）

根源的隔時性(diachronie)の共時化・同時化、それによる同一化（レヴィナス『存在するとは別の仕方で』）

超高齢の人間学――ピエール・パシェ紹介

「わが母」は自分が死ぬという「一人称の死」の観念も、自分を度々見舞っていた娘の死という「二人称の死」の観念も喪失している。しかしながら、「喪失する」とはどういうことだろうか。「彼女の退行を幼児の進歩を観察するように見つめる」とパシェは言っている。では「獲得する」とはどういうことだろうか。幼児は言語的アイデンティティを得るに際して多大な言語能力を喪失する。とすれば「わが母」は喪失することで何かを得ているのだろうか。アルトーやレヴィナスがそれをめぐって思索を展開したところの「不能性＝没能力」(impouvoir)の問題にパシェは分け入っていく。
「一人称の死」の観念も「二人称の死」の観念も失った「わが母」が「ショアー」〔ホロコ

ースト〕における見知らぬ子供たちの死、「三人称の死」の観念を維持しているかに見えるのはなぜなのか。「わが母」は語る能力を失ったのではなく「黙る能力」を失ったのだとのパシェの言葉も印象的だったが、彼女が「母語」ならざるロシア語を話しているかに聞こえるのはなぜなのか。娘も息子も見分けられず、自分が誰であるかも認知していないはずの「わが母」が、「マダム・パシェ」と呼びかけられるとき、何か反応が生じているように感じられるのはなぜなのか。「祖母」をもはや「人間」ならざるものとみなしえいた孫が見舞った後、祖母が「また来ていいわよ」と言ったように孫に感じられたのはなぜなのか。／これらの疑問符は、われわれが脳の複雑さのほんの一部しか知らないという事実とも連動しながら、「人間性の限界」という根本的問題へと差し向けられる。（合田正人「誰であれ人の最果てに」）

ブートルーから九鬼周造へ
三つの偶然性

偶然性の三様態　（一）定言的偶然、（二）仮言的偶然、（三）離接的偶然の三つがなければならない。(...)　／事実としてのこの三様態の区分に相当するものはアリストテレスに見ることが出来る。(...)アリストテレスのいふ「シュムベベコス」(accidens)は定言的偶然に当り、「アウトマトン」(casus)と「テュケー」(fortuna)とは仮説的偶然に当り、「エンデコメノン」(contingens)は離接的偶然に当っている。（九鬼周造『偶然性の問題』、『九鬼周造全集』第二巻）

我々が其存在を必然に措定し、又は、それを必然に排除する何も見出さない限り、自分は個物(res singulares)を偶然と呼ぶ。（スピノザ『エティカ』）

偶然を成立せしめる二元的相対性は到るところに間主観性を開示することによって根言的に社会性を構成する。(...)偶然に対する驚異は単に現在にのみ基礎づけられねばならぬことはない。我々は偶然性の驚異を未来によって逆倒的に基礎づけることが出来る。
偶然性は不可能性が可能性へ接する接点である。偶然性の中に極微の可能性を把握し、未来的なる可能性をはぐくむことによって行為の曲線を展開し、翻って現在的なる偶然性の生命的意味を逆倒的に理解することが出来る。（『偶然性の問題』）

内在の錯覚と超越論的「私」

「〈われ思う〉はすべてのわれわれの表象に随伴しえるのでなければならない」ということに関しては、カントに同意しなければならないだろう。けれども、だからといって、事実として、〈われ〉はわれわれのすべての意識に住み着いて、われわれの経験の史上の綜合を実際に遂行している、と結論しなければならないのだろうか。これはカントの思想を歪曲することであるように思える。批判の問題は権利的問題〔こうであるべき、こうであらねばならない〕であるのだから。カントは〈われ思う〉の事実的実在については何ら肯定していないのである。（サルトル「エゴの超越」）

このこと〔両眼視野闘争〕が示唆するのは、何もないところにまずクオリアが生み出され、そのようなクオリアの集合が〈私〉を定義するのではなく、そもそもクオリアはそれを感じる〈私〉とセットになって生み出されるということである。（茂木健一郎『脳内現象』）

関係性：中枢と末梢

実際に、外的知覚の進歩を、モネラから高等脊椎動物まで、一歩一歩辿ってみよう。原形質の単なる塊の状態で、生物はすでに被刺激性と収縮性を持ち、外的諸刺激の影響を受け、それらに機械的、物理的、化学的な反作用によって反応していることが分かる。有機体の系列を昇るにつれて、生理学的な機能が分化していくのが見られる。神経細胞が現れ、多様化し、集まって体系を成すようになる。同時に、動物は外の刺激に対して、より多様な運動によって反応することになる。しかし、受容された震動が、実行された運動へとただちに引き継がれないときでさえ、震動はただその機会を待っているだけのように思われるし、有機体に周囲の諸変化を伝えるその同じ印象が、有機体に、それらの変化に適応することを決心させるか、その準備をさせる。数々の高等脊椎動物においては、とりわけ髄のうちに位置する純粋な自動運動（オートマティスム）と、脳の働きを必要とする意志的活動とのあいだの区別がおそらく根底的なものとなる。受容された印象が、再び運動として発揮される代わりに、精神化して認識になるのを思い描くこともできるだろう。しかし、脳の諸機能と脊髄系の反射活動とのあいだには複雑さの程度の相違しかなく、本性の相違があるのではないことを納得するためには、脳の構造と脊髄の構造とを比較するだけで十分である。実際、反射作用においては、何が起こっているのか。刺激によって伝達された求心的運動は、脊髄の神経細胞を介して、すぐさま遠心的運動へと反射され、それが筋肉の収縮を引き起こすことになる。他方、脳系の機能はいかなる点に存しているのか。周囲の震動は、脊髄の運動細胞へと直接伝播して不可欠な収縮を筋肉にもたらす代わりに、最初に脳髄へと遡上し、次いで、反射運動において働いていた脊髄の同じ運動細胞へと再び降り来る。では、この回り道で、件の震動は何を獲得したのか。その震動は大脳皮質のいわゆる感覚細胞のなかに何を探しにいったのか。そこから震動はみずから諸事物の表象へと変容する奇跡的能力を汲み取るなどということは、私は納得しないし、これからも決して納得しないだろう。それに私は、すぐ後で分かるように、この仮説を無用なものとみなしている。それに対して、私にとって実に明白なのは、感覚領野と呼ばれる皮質の多様な領野の諸細胞――求心性繊維の末端の樹状突起とローランド帯の運動諸細胞とのあいだに介在する諸細胞――が、受容された震動に、脊髄の何らかの運動機構を随意的に獲得させ、かくして、その結果の選択を可能にするということだ。介在する細胞が増えれば増えるほど、また、おそらく多様な仕方で近づき合えるアメーバ状の突起をそれらの細胞がより多く放出すればするほど、周辺から来たひとつの同じ震動の前に開かれる道もより数多く、より多様になり、ひいては、同一の刺激がそのいずれかを選べるような運動体系の数もより多くなるだろう。したがって、われわれ考えでは、**脳は一種の中央電話局以外のもので**

はありえない。その役割は、「通話させること」もしくは、それを待機の状態に置くことである。脳はそれが受容するものに何も付け加えない。そうではなく、すべての知覚器官が脳のうちにみずからの最後の延長部分を差し込んでいるのだから、また、脊髄と延髄のすべての運動機構がそこにみずからの専属代理人をもつのだから、脳は紛れもなくひとつの中心を構成しているのであって、周辺的刺激はそこで、押しつけられたものではなく、みずから選択したものであるような何らかの運動機構と関係をもつことになる。他方、脳の実質のなかでは、周辺から来た同じひとつの刺激に対して、きわめて多くの道が一挙に開かれうるのだから、この震動は、そこで無限に自分を分割していく能力、ひいては、単に生まれかけの無数の運動反応のあいだで迷う能力を有している。そういうわけで、脳の役割は、ある時は、集められた運動を、選択されたひとつの反応器官へと導くことであり、またある時は、この運動がそこに孕まれた可能的な反応すべてを描き出し、みずから分散しながら自己を分析できるように、この運動に対してあらゆる運動経路をすべて開き示すことである。言い換えれば、脳は集められた運動にとっては分析の道具であり、実行された運動との関係では選択の道具であるようにわれわれには思われる。しかし、どちらの場合も、脳の役割は、運動を伝達し、分割することにとどまる。皮質の高等な中枢においても脊髄においても、神経の諸要素は認識をめざして働くのではない。それらは多くの可能的な諸作用を一度に素描する、もしくは、それらの作用のうちのいずれかひとつを準備するだけである。(ベルクソン『物質と記憶』)

心脳問題と哲学者たち

脳が何かの刺戟を受ける、それはもちろん脳のある場所で起る事件です。ところが私に見えるものは目の前、または遥かかなたに、つまり頭蓋骨の外に見え、また聞こえるのです。ですから、脳が何かを受取るとどうして脳の外部にものが見えるのか、それを誰も答えることができないのです。そしてそれは現在の生理学が未熟だからそうなのではありません。どんなに生理学が発展しようとそれに答えることはできないのです。(大森荘蔵「心」、『「心-身」の問題』東京大学出版会、１９８０年)

視覚の場合に話を戻しますと、脳の視覚領野の物理化学的状態から今見えている風景には何の因果的プロセスも考えない、ということです。それは、考える必要がない、と言うことができるでしょう。なぜなら、或る風景が見えている、それは即ち、脳がかくかくになっていることなのですから。ただ、ではなぜかくかくの風景が見えるのは即ち脳がかくかくであるであることなのか、という問いに答はありません。事実そうだからだ、と言う以外にはです。(同上)

古典的な身心問題では、脳と心の関係について、相互作用、随伴、平行、同一性、あるいは一方の消去などなど、現代に至るまで実に多様な議論が展開されてきた。しかし廣松によれば、(...)これらの議論は客観的・生理学的知見を大前提としたままで問題設定を行い、この問題枠組み自体を問うことはしないために不毛なものにとどまっているということになる。(村田純一による解説、『廣松渉全集』岩波書店、第四巻) →「転成説」:現相世界に

よる「心」と「脳」の脱物象化

精神分析家との対話

ミレール　結局あなたにはあなたなりのフィクションがあって、それはシナプス人間なんですよ。何よりも重要なのは、シナプスの機能を安定化し、また維持する必要性というわけなんだ。あらゆる活動は、最も根本的なものから最も高度なものにいたるまで、すべてわれわれの中のシナプス人間が生きていくために必要なのだと考えられている。
シャンジュー　それは言いすぎだ。シナプスしかないわけじゃない。別の信号転送システムもある。私はまず第一に、神経系は「ニューロン」、それもニューロンだけの集合として考えるべきだと思う。行動は、神経系のニューロンとそのシナプスの特殊な機能状態の結果として出てくる。(...)だから私としては「ニューロン人間」について語る方がいい。
ミレール　ではよろしい。『オルニカール？』では、われわれの対談の題を「ニューロン人間についての対話」ということにしよう。(『ニューロン人間』訳者あとがき、四一七-四一八頁)

わたしは数日前〔二〇〇五四月〕に、精神分析協会の人たちの前で講演を行ないました。そこで、脳外傷に関する神経科学者たちの研究の重要性について話したのです。わたしはいかにこれらの研究が精神分析との、特に心的外傷をめぐるフロイトの思考との対話を新たに始めさせてくれるかを示しました。わたしの言葉は「職業」精神分析家たちによって激しく拒絶されました。彼らはわたしに、心的外傷に関してラカンがすでに語り尽くしているのであって（セミネール第十一巻『精神分析の四基本概念』のなかの「テュケーとオートマトン」を参照)、脳損傷の考察などこの点に関して何ひとつ新しいものをもたらさないと反論したのです。(『われわれの脳をどうするか』春秋社、一八四頁)

ミラーニューロンと鏡の段階

メラニー・クラインのいう偏執的反応と、ラカンが鏡の段階と呼ぶものとのあいだには、真の同一性が確立されるべきである。ただ、ラカンが、鏡を前にした子供の行動について記述した際の展望はきわめて豊かな帰結を伴っています。／鏡との出会い(rencontre)は偶然の出来事である、というよりもむしろ、多少なりとも母親に援助されて子供がなす驚くべき発見です。(...)鏡を前にした何度かの面食らわせる「経験」の後で、子供は、自分が見ているものは、鏡の背後に隠れた誰かではなく、自分自身であることを発見する。鏡のなかの像の動きと子供自身の動きのあいだに何らかの連関があることを確認することがこの発見に貢献する。疑念が残るとしても、それもたちどころに消え去ってしまう。特に母親かその代わりのひとに抱えられている場合には、子供は二つの像を鏡のなかに見て、自分を抱えている者のほうに振り向き、その同一性の確認を経て自己の同一性と、母親の嬉々とした同意を確認する。／まさにこのとき、子供はいわば全身で喜びを表す。子供は笑い、母親の腕のなかで垂直方向に身を起こし、飛び上がろうとする。(フランソワ・ｔｐスェイエス『教育者に向けての講義』)

心身平行論の新たな解釈へ

身体がいったい何をなしうるかを、これまで誰も確定してこなかった。(スピノザ『エトカ』第三部定理二備考)

身体の観念と身体とは、言い換えれば精神と身体とは同一個体であって、それがある時は思惟の属性のもとである時は延長の属性のもとで考えられるものであることを明らかにした。(同上第二部定理二一、備考)

この予定調和によれば、身体はまるで霊魂など存在しない(実際には、これは不可能なことである)かのごとく働き、霊魂はまるで身体など存在しないかのごとく働くのであるが、しかし両方とも、一方が他方へと働きを及ぼしあうかのごとくに作用するのである。(ライプニッツ『モナドロジー』八一項)

われわれがあらゆる事物を精神と物体から合成するのを見て、そういう混合物ならば、われわれにとって何よりも理解されやすい、と誰が思わないであろうか。ところが、実は、それこそ最も理解しがたいものなのである。人間は、彼自身にとって、自然のなかでの最も不思議な対象である。なぜなら、人間は身体が何であるかを考えることができない。同様に、精神が何であるかを考えることもできない。そして、身体がいかにして精神と一つに結ばれうるかというようなことは、とうてい理解することができない。そこに彼の困難の頂点がある。しかし、それこそまさに、彼自身の存在である。「いかにして精神が身体と結合されるかを、人間は理解することができない。しかしそれが人間である」(アウグスティヌス『神の国』二一巻一〇章)。(パスカル『パンセ』)